

時評

KM(国田美和)バレエ
スタジオ2019
バレエコンサート

伸び盛りの子供たちだけでなく、大人からバレエを始めた方々からも人気の指導者である国田美和。10年を軽く超えて通い続ける大人の生徒の方も多く、そういった方にオリジナル演目で男性と組む機会を用意するなど、それぞれのやりがいや魅力を活かす工夫が随所に感じられる舞台だった。

国田自身は、最後の演目「白鳥の湖」第2幕よりで、主役オデットを踊った。王子は山本隆之。長年、新国立劇場バレエ

団でプリンシパルを務めた山本はこの役をもう数え切れないほど踊っているのだろう。抑えた、さりげない演技の中に、王子の複雑な想いがにじみ、たたずむだけでも物語に引きこんでくれる。

そして、国田のオデットには、凜と筋の通った強さがあり、弱々しく助けを待っただけの悲劇のヒロインではない——国田自身の人間性からの魅力

も自然ににじませたと感じられる存在に仕上がっていた。

小さな白鳥や大きな白鳥、それに、コール・ド・バレエは、さまざまな年代が入り交じって構成されており、課題はもちろんあるが、一人ひとりが、このクラシック・バレエの名作中の名作に真摯に向き合っていたことが感じられた。

すずな
(嵯あつこ)



「白鳥の湖」第2幕より (10月14日、クレオ大阪中央) © 古都栄二 (テス大阪)